

地域の伝統を守る

鬼北泉貨紙保存会の活動

今年度、地域おこし協力隊の正木健夫さんと栗野正臣さんが新たに鬼北泉貨紙保存会に入会しました。後継者不足が課題であった泉貨紙保存会に訪れた大きな転機。紙漉きを行う冬を迎え、正木さんと栗野さんの挑戦が本格的にスタートしました。



1_正木さんと栗野さんに指導する平野会長
2,7,8_舟入れ、ちり取り、煮熟を行う栗野さん
3,4,5_手漉き、板付け、天日干しを行う正木さん
6_川さらしを行う正木さんと栗野さん

泉貨紙の歴史

泉貨紙は、楮こうぞを原料として作られる手漉き和紙で、2枚の紙を漉いた直後に貼り合わせて、1枚の紙にする独特の製法によって作られます。厚みがあり、丈夫で耐久性に優れていることが、泉貨紙の特徴。鬼北町内での生産は、江戸時代の寛文年間（1661～1672年）に始まったといわれており、一時は、小倉、上川、岩谷部落を中心に手漉き業者が約50軒ありました。しかし、その後、需要が減少していったことから、昭和44年6月頃に町内の泉貨紙は、その姿を消してしまいました。一度は途絶えてしまった泉貨紙ですが、昭和60年に泉貨紙を復活させるため、地域住民の有志が立ち上がり、広見泉貨紙保存会を結成。現在は、平野邦彦氏が会長を務め、伝統ある泉貨紙の魅力は今も伝え続けています。

泉貨紙を後世へ残したい

泉貨紙は、完成するまでにいくつもの気が遠くなる作業が必要です。

なる作業が必要でです。

例えば、泉貨紙の原料である楮こうぞの樹皮からゴミ（外側の茶色い皮など）を取り除く作業。毎年、約40kgの楮こうぞの樹皮を、会員たちは手作業で、長い時間をかけながらゴミを取り除いていきます。言い換えれば、みかんの黄色の皮を取り除き、白い薄皮を残していくような大変な作業です。

また、泉貨紙を作る季節は、寒さの厳しい冬。寒い季節に作業を行うのは、気温が高いと泉貨紙を乾燥させる過程でカビが発生してしまうこと、手漉きの前に入れる「ねり」と呼ばれる粘着剤の効果なくなってしまうことが大きな理由です。そのため、いくら寒くても暖房をつけることができませぬ。身を切るような寒さが体を襲い、あかぎれやしもやけができることもよくあることです。このほかにも、使用する道具の修理など、1枚の紙を漉くまでにたくさんさんの作業が必要になります。